

## キリスト教主義学校における礼拝の意味 —「キリスト教主義の学校」を教会たらしめる営み—

市原 信太郎

### はじめに

筆者の勤務する当短期大学に限らず、日本のほとんどのキリスト教主義学校において、学生・教員の多くは、一般的な意味での「クリスチャン」のカテゴリーには属していないであろう。しかし一方では、これらキリスト教主義学校のほとんどにおいて、全学生・教員を対象として礼拝が行われており、それはキリスト教主義学校における宗教教育の重要な一要素とみなされているのである。これは、日本のような非キリスト教国におけるキリスト教主義学校の大きな特徴と考えることができるのではなかろうか。

筆者は 2005 年 6 月、英国カンタベリーとヨークを会場に行われた聖公会関係大学連合 (Colleges and Universities of the Anglican Communion) の総会に参加する機会を得たが、その際に各国の大学における学内礼拝の状況について、各大学のチャプレンらと情報を交換する機会があった。それぞれの国や学校の背景による状況の差はあるにしても、例外なく礼拝はチャプレンの重要な仕事となっていた。インドから参加したあるチャプレンは、大学がチャプレンとしての給与を支払えないので哲学の教員として勤務しているが、明らかに仕事の軸足はチャプレンとしての職務にあり、学内の様々な行事に礼拝の司式者として参加を求められるとのことであった。香港中文大学崇基学院のチャプレンは、あえて礼拝を「集会 (assembly)」として持つことにより、多くの学生が参加しているという事例を紹介した。一方、この総会の会場の一つとなったカンタベリーのクライスト・チャーチ・カレッジにおいて週に 1 回月曜日にチャペルで行われている聖餐式には、司式のチャプレンのほかには学生が一人参加してただけであった。こういった各国の事例、ことにいわゆる「キリスト教国」における学校礼拝の

現状は、自分の勤務する学校で筆者自身が行っている学校礼拝を問い直す必要を感じさせるものであった。

この会議に日本から参加したチャプレンやキリスト教担当教員の間でも、各校のさまざまな事情について毎晩のように話し合われた。その中で我々が改めて認識したのは、「キリスト教主義学校における我々の職務 (ministry) とは、数百から数千、数万人を対象とした牧会である」ということであった。「牧会」という言葉は、必ずしもその対象が教会のメンバーであることを意味しないし、必要ともしないであろうが、しかしなお、この視点はキリスト教主義学校をある種の「教会」として理解することの可能性を示唆するものと言えるであろうし、現代における教会のあり方について一つの視座を提供するものとなりうるのではないだろうか。

本学においては、少ない時でも学生の半数程度が礼拝に参加している。これは、礼拝出席を義務としていない (出席した学生は名簿にチェックすることに一応なっているが) 中では、特異に高い出席率であると言えよう。この事実を、この学校に勤務するチャプレンであるわたしの側からはどのように理解しうるのか、というのが本論に取り組んでみようと思った動機である。以下、コミュニケーション教会論を元にキリスト教主義学校の教会論的位置づけについて論じ、キリスト教主義学校そのものを拡張された概念としての「教会」として理解することを試みたい。そして、この「教会」において行われている礼拝こそが、この「教会」を教会たらしめるものであることを論じたい。

### 従来 of 議論

筆者の議論に入る前に、これまで日本においてなされてきた学校礼拝についての議論を、網羅的

ではないが紹介しておこう。

まず、プロテスタント教会の一つの典型的な論として、船本弘毅のものを挙げたい。船本によれば、日曜日に教会で行われる礼拝と週日の学校における礼拝とは、多くの共通点をそこに認めつつも、形式・内容や精神・目標・その願い等において大きな違いが存在する。日本において、キリスト教主義学校が「ミッション・スクール」と呼ばれた時代には、「ミッションの手段として学校が用いられる傾向があり、そこで何よりも重視されたことは受洗者の数であった。この場合、学校礼拝は明確に教会へつなぐ役目を持っていたのであり、その意味では教会礼拝の僕として学校礼拝を位置づけることが可能であった。」現代において、「いわゆるミッションのためのスクールではなく、主の御名によって立てられたキリスト教の建学の精神を、学校という文化の領域において、教会の助けと祈りに支えられつつ、生かしていくことが目指されるようになった」キリスト教主義学校においても、学校礼拝を「礼拝」と呼ぶことは可能であり、それを「チャペル行事とかキリスト教講話の時間というように言い変える必要は必ずしもない」が、「それが大学という場、あるいは学校という教育の場、そしてそこに学ぶ人間という限定と制約を持っており、あるいはそのことに自己限定して行なわれる礼拝であり、公同の教会の聖日礼拝とは、場所において、目的において、運営の仕方において、相違のあることを明確にしなければならない」と述べる<sup>1</sup>。船本の学校礼拝に関する議論は、「キリスト教主義学校は教会ではないし、キリスト者の世界ではなく、まさに世俗の社会である」<sup>2</sup>という教会論に基づくものであり、その意味において彼の論ずる「相違」は、単なる形式に留まらない本質的な両者の分離を語るものである。

竹田伸一は、キリスト教大学に勤務する中で「学校礼拝にある種の違和感をしばしば覚えて過ごしてきた」という自らの経験を告白し、「学校礼拝というものが、キリスト教とは異質なものに変質する危険性をいつも抱えている」という危機感を表明している。そして、「献身が問われる毎回の献金、キリストの体に与る聖礼典がないという点で、学校礼拝は教会の礼拝とは決定的に違

うものであり、「学校礼拝は……本質的には『伝道』という要素が中心」であると言う。キリスト教主義学校は教会ではないがゆえに、学校礼拝は教会の礼拝とは別のものであり、教会の礼拝へ導くという役割を持つものであると見るのである<sup>3</sup>。

これに対し、船本は「礼拝はキリスト者に課せられた務めであり、同時にキリスト者に許された特権である」としながらも、世界教会協議会(WCC)の信仰職制委員会による「礼拝の方法」(Ways of Worship、1961)から「礼拝はひとりひとりの敬虔なキリスト者の集会ではなく、教会の主との直接的な関係における共同の行為であり、個人の礼拝は共同の礼拝、すなわち、主のからだなる教会の礼拝にその根拠をおいている、と主張されている」という見解を紹介し、「ここに用いられている『主のからだなる教会』とは、言うまでもなく、各個教会や教派ではなく、使徒信条が告白する『公同の教会』にほかならない」と述べている。そして、「このような公同の教会がささげる礼拝の一環として個人の礼拝、教会の聖日礼拝、そしてキリスト教主義学校における学校礼拝も、その根拠と意味とを持つ」と論じている<sup>4</sup>。ここでは、学校礼拝についての概念を拡張する可能性が示されていると言うことができよう。

倉松功は、キリスト教主義学校の礼拝について、その学校共同体における位置づけに着目した論を展開している。倉松は、議論の前提として「礼拝の形式、要素は多様であるが、礼拝がなければ、キリスト教は存在しえない」と述べ、キリスト教主義学校において礼拝がその公的な校事として位置づけられていることが、「キリスト教」学校であるためには必須であると主張する。そして、キリスト教主義学校の礼拝が「聖礼典を行なわない」という点で、礼拝としては、十分なものと言えない<sup>5</sup>がゆえに、そのような礼拝を求めざるを得ないと指摘し、キリスト教主義学校がそこで語られる福音について責任的であるためには、それに基づく共同体、すなわち学校教会の形成を必然的に指向せざるを得ないが、一方で学校は特定の信条や信仰告白を告白する共同体ではないという意味において、教会とは質を異にするものであることも認めている<sup>5</sup>。

高橋義文は、キリスト教主義学校における礼拝

について、その教育的位置づけから興味深い考察をしている。高橋は、キリスト教主義学校の礼拝が通常カリキュラムの外に位置づけられざるを得ない中で、この礼拝が多くの場合非キリスト者である学生や教員によって行われるがゆえにそもそも礼拝として成立するのかどうか、という疑問を、学校礼拝を教会の礼拝と峻別することによって解決しようとするならば、今度は「礼拝の場は……ホーム・ルームや道德教育などの時間と本質的に大差ないことになってしまう」という別の疑問を招きかねないことを指摘する。そして、キリスト教主義学校において礼拝が重要であるという時、その重要性はその学校の教育全体とどのような関係において主張されるのか、という問を投げかける。高橋は、ティリッヒの「導入教育」としての宗教教育論を基に、究極的・無制約的・普遍的なもの、すなわち神に向けての導入教育としての宗教教育の意義を説き、この神を人格的存在としてとらえる時、そこに自ずから礼拝の必然性が主張され得るとする。また、導入教育の場としての礼拝を考える上では、それを成り立たせる共同体にも目を向ける必要があり、キリスト教主義学校は「教育共同体」であると同時に「礼拝共同体」でもあると述べる。高橋は、「学校と教会の区別を無視して、直ちに両者の一体化をはかる」ことには同意せず、「両者の間に自ずから明確な機能の違いが存在する」と言いつつも、「その本質を問うならば、キリスト教学校は教会と無関係にあり得ない」と主張する。

ローマ・カトリック学校においては、事情を少々異にするようである。筆者の勤務する当短大において、ローマ・カトリックの修道会が経営する高校（計三校）出身の学生たちに聞いたところでは、特別な行事の時以外に「全校礼拝」のような形で定期的に礼拝が行われているのはそのうち一校だけで、他の二校では礼拝として集まるのではなく、「学年朝礼」「全校朝礼」のようなものの中に祈りの時間もあるという位置づけである。その他、すべての学校において毎朝（および毎終業時）、各クラスの教室などにおいて放送等を利用した祈りの時間が持たれているとのことであった。大学に関しても事情はほぼ同様で、筆者の周りで聞いた範囲の話として言えば、授業以外での宗教

教育はキリスト教入門講座のような形で行われている場合が多く、希望する学生を対象に定期的にミサが行われているということはあっても、「礼拝」という形で全校の学生が集まるのは特別な行事の際のみというところがほとんどのようである。ローマ・カトリック系の学校に関して学校礼拝を論じた文献の数は、プロテスタント系のそれに比して少ないのであるが、このような事情を考えれば無理からぬところかも知れない。

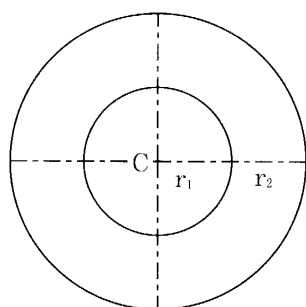
カトリック学校の教論である佐々木慶照は、「礼拝」という用語自体、カトリック学校においてほとんど使われておらず、プロテスタント系のキリスト教主義学校のような意味で「礼拝式」、「礼拝行事」といった表現を用いることはないと言っている。そして佐々木は、全国 104 校のカトリック学校（中学・高校）のアンケート結果を基にした上智大学の調査結果（1979）を紹介し、その中で礼拝や宗教行事に関することがらを次のように分析している。まず、礼拝の位置づけに関しては、全校対象のものとして希望者対象のものを分けていることが大きな特徴として挙げられる。全員参加のものとしては、宗教行事及び朝礼があり、後者でも宗教教育のためという意図がある。宗教行事の実施回数や内容に関しては、ほとんどの学校に共通するのはクリスマスだけで、学校によりかなりの相違がある。一方、宗教行事を意図しない学校行事において、その中に祈りの機会を設けようという意図は各校に共通しており、入学式や卒業式、文化・体育的な諸行事に礼拝が導入されている。その他、礼拝の計画や実施において、生徒自身の参加や担当が目立っている。このように、「カトリック学校における礼拝は、画一的一律的なものを否定し、それぞれの学校の実態にもとづく手づくりのものになってきて」おり、「とくに全校生対象の場合には、礼拝に独立した大きな位置づけを与えることよりも、平常の教育活動の中に融合させようとしている傾向が顕著で」ある。また、全校対象の礼拝以外に、学年単位や小グループの希望者を対象とした宗教活動が重要視されている。そして、ミサがローマ・カトリック教会の究極的な礼拝祭儀であることを認めながら、それを指向する予備的礼拝形式として、カトリック学校の礼拝の可能性を認識し、「キリスト教教育の

役割の一つは、生徒たちを教会（キリストの神秘的生命的共同体）へと送り出すことである<sup>6</sup>。しかし同時に「日本のキリスト教学校は、信者や洗礼希望者の数よりも、はるかに多数の生徒たちへのキリスト教教育の使命をになっ<sup>7</sup>て」おり、「キリストのことばを伝えることは、礼拝とともにそれ以外のあらゆる方法によってなされるもの」であることを強調する<sup>8</sup>。

以上の議論を総括すれば、大きな論点は二点ほどに絞られよう。まず、「キリスト教主義学校と教会との関係はどのようなものか」という大きな問いがある。そしてこの延長線上に、「キリスト教主義学校における礼拝は学校全体に対してどのような意味を持つか」という問いが位置づけられる。この二つの問いに対して、以下それぞれに考えてみたい。

### 「教会」としてのキリスト教主義学校

0. クルマンは、以下のような同心円を用いて教会と世界の間を説明する。



C = キリスト  
 $r_1$  = 教会  
 $r_2$  = 世界  
 $r_1 + r_2$  = キリストの領域

クルマンは、キリストの死と復活の結果、キリストには万物の支配が委ねられており、全世界は決定的に救済史の中に引き入れられているが、「教会の中に進められてゆくような狭い救済史」と「普遍的な出来事」との間の区別は未だなくなっていないとする。そして、キリストは万物の首であり、また教会の首でもあるという二重構造のうちにあるが、キリストの体はただ教会によってのみ現され、「キリストの体としての教会は地上にあって彼の業を継続する」ものである。教会と世界は、単なる隣り合わせでもなければ一致する

ものでもなく、キリストという共通の中心を持つ。そして、キリストの支配は両者に同じように及んでいるが、内側の円（教会）においてはそのことに自覚的であり、外側の円（世界）では無自覚的である。そして、教会はこの事実を世界に宣べ伝えなければならず、それゆえにその境の外の領域に関心をもたなければならないと言う<sup>7</sup>。

このようなクルマンの教会観は、伝統的な聖俗二元論的教会理解からは進んだものであるが、このように教会と世界の間を関係する時、教会はある種の「磁場」として、人々を無自覚的にキリストの支配に置かれる立場から、その支配を自覚するものとなるように人々を引き寄せる存在としてとらえられることになる。キリスト教主義学校に対してこの見方を適用すれば、キリスト教主義学校は内側の円と外側の円の接点に近い領域に位置し、外側の円から内側の円へという吸引力を發揮するための一つの通路であるということになるであろう。いわゆる「ミッション・スクール」としてのキリスト教主義学校論は、このような視点に立つものと言える。

しかしながら、新約聖書に描かれているイエスの姿を考えると、このような方向のみで教会を理解することには限界を感じざるを得ない。例えば、マルコ6:6b「イエスは付近の村を巡り歩いてお教えになった」の「巡り歩く」は、ギリシャ語原文では *κύκλος* であり、「ぐるぐる回る」というような意味がある。イエスの宣教は、当時の宗教事情を考えると、一箇所に腰を落ち着けてそこに人々を呼び寄せるといったよりも自分の側からあちこちへ回りながら行われたという点において、際だった特徴があったということができる。このことをクルマンのモデルにあてはめると、教会の中心であるキリストの側から世界の側へと動いていくという働きが、教会の宣教の働きであると見ることができるのではないだろうか。すなわち、クルマンの図の内側の円は静的なものではなく、それ自体が大きな円の中を自在に動き回ることができるし、またキリスト自身そうせずにはられないのである。そしてそれによって、世界が真に「キリストの領域」として認識されるのである。

このような教会理解は、コミュニケーション教会論 (communion ecclesiology) によってよりの確に

表現することができる<sup>8</sup>。コミュニオン教会論自体はある種のパラダイムと呼ぶべきものであり、様々なバリエーションを包含するが、教会の本質を「コミュニオン（交わり）」として理解しようとするのが大きな特徴である。この教会論においても、教会というものの可視的な組織体としての性質を重視し、それとの交わりを持つことの重要性を強調していくと、これはクルマンの教会観に近いものとなる。すなわち、クルマンの図の小円へと吸引されていくことが、単に「教会との交わり」という言葉で置き換えられるに過ぎない。しかし、クルマンが言う「境の外の領域に関心を持つ」ということを「コミュニオン」としてとらえようとするとき、クルマンの図は新しい意味を持ってくるのである。教会の本質はコミュニオンであるがゆえに、図の小円は小円単独では存在し得ない。小円は大円とのコミュニオンにおいて初めて完全な教会たり得るのである。言い換えると、世界のすべての部分が教会と無関係に存在しない、という事実に至ることなしには、教会は完全な教会であり得ないのである。だからこそ、小円は大円の至るところと関係を持つことができるように、その境界を広げていくのである。

このように考えると、クルマンの図の大円が「普遍の教会 (the Church Universal)」と完全なコミュニオンに入っていくプロセスとして、救済史を理解することができる。クルマンは、中間時的な性格を持つ現在において、両者の円は一致し得ないという。逆に言うと、終末の完成の時には小円が大円を吸収し終わり、両者が一つとなることをもって普遍の教会が実現する。この出来事をコミュニオン教会論の視点から見ると、終末の完成の時とは大円と小円とが完全な交わりに入った時である、と説明することができよう。大円と小円とが一致する、という点で両者は同じ現象を意味するが、吸収の結果一致するのか、小円が大円と同じ大きさまで拡大した結果一致するのか、という違いとしてこの両者を区別できよう。

このような教会観を表現するには、クルマンのような面積的モデルよりは、むしろ色によるモデルのほうがより適切なイメージを与えるのではないだろうか。仮に教会を白、社会を黒で表現した場合、従来の教会観が黒を白で塗りつぶす、ある

いは黒を白の中に取り込んで染め上げてしまうことであったとするならば、コミュニオン教会論は黒と白とが混ざり合い、灰色という新たな色が生じる中で、それが徐々に白に近づいていくというプロセスとして教会を説明しようとしていると言えよう。すなわち、教会と社会との境目は、(クルマン自身も指摘していることではあるが)明確に二分されるようなものではなく、むしろグラデーションをもって表現されるのが適切なものとなる。

さて、してみればキリスト教主義学校と教会との関係をコミュニオン教会論的に理解しようとする時、そこにはどのような位置が与えられるであろうか。

教会の本質はコミュニオンなのであるから、世界における教会の使命とはこのコミュニオンをその中に現実化することである。してみれば、キリスト教主義学校とは、社会を教会へと吸引するための通路ではなく、その置かれている場所においてこのコミュニオンが現実化され、目に見える形で現れるための場と考えるべきなのである。キリスト教主義学校がいわゆる「教会」ではなく、そこで「キリスト教領域」と「非キリスト教領域」とが混在するからこそ、まさにそこでは世界を神とのコミュニオンのうちに入れようとする働きが起こっているのである。この働きを通して、「非キリスト教領域」に存在すると思われる人々は教会と無関係な存在ではなくなり、教会とのコミュニオンのうちに入れられていくのである。それはまさしく、キリスト教主義学校が先のモデルの「グレーゾーン」に立つ働きであるということに他ならず、そのことこそがキリスト教主義学校の使命である。教会は、そのグレーの領域を含めた全体として、初めて教会であると言えるのである。

キリスト教主義学校は、多くが指摘するように「教会そのものではないが、教会と無関係にあるとも言えない」というアンビバレントな存在である。しかし、そのような領域を含めて教会は教会として成り立っている。そのメンバーの多くは洗礼を受けている、あるいは何らかの信仰告白をしている、という意味でのキリスト者ではないが、しかし教会とのコミュニオンのうちにあるという意味において、彼らも教会のメンバーであると筆

者は見たい<sup>9</sup>。そして同じ意味において、キリスト教主義学校そのものも教会の一部であると主張したいのである。これは特に、日本のような非キリスト教国におけるキリスト教主義学校の使命を考える時、重要な視点ではないかと思われる。

### キリスト教主義学校における礼拝の意味

このようにキリスト教主義学校を理解する時、ではそこで行われている礼拝はどのように理解しうるであろうか。

礼拝というものの意味について詳しく述べることは本論の範疇外ではあるが、英語で「礼拝」にあたる service, worship, liturgy という3つの言葉を手がかりに少し考えてみたい。Service は、「神に仕える」ということから礼拝、ことに公の礼拝という意味に用いられるようになった。Worship は、語源的には worth (価値) という言葉から来ており、「価値あるものに栄光を帰すること」というのが元の意味である。Liturgy については、ギリシャ語の *λειτουργία* が語源だが、この語は *λαός* 「民」と *ἔργον* 「業」の合成語である。もともと「個人が負担する公共の務め」を意味していたこの言葉は、旧約聖書がギリシャ語に翻訳されたときに、「皆で捧げる」というところから「礼拝」の意味で用いられるようになった。これらをまとめると、礼拝とはすなわち、「神に奉仕の業を捧げ」、「神のすばらしさを知り、そしてそれをたたえる」、それを「皆で行う」ということである<sup>10</sup>。

すでに紹介した議論の中で、キリスト教主義学校の礼拝が「聖礼典」(聖公会的に言えば sacrament) を伴わないがゆえに「完全な礼拝」とは言えない、という論がある。また、本来「礼拝」というものは「キリスト者であること」と切り離せないという見解もあり、教会で行われている礼拝と学校礼拝とが本質的に異なるものであるという意見も少なくない。確かに、 sacrament である礼拝(例えば聖餐式など)は学校礼拝としては行いにくいと言えるが、しかしその部分にのみ視線を集中していくならば、 sacrament 以外の教会の礼拝は無価値な、あるいは価値の低いものなのであろうか、という別の問いに直面せざるを得ないし、高橋が指摘するようにホームルームとの

差はどこにあるのかという問いも生じてくる。

ここで我々は、礼拝が「民の共同の業」であることを再認識する必要がある。我々が礼拝を行う時、その礼拝が「普遍の教会」とのコミュニオンのうちに行われるならば、それは目の前にある、その時その場所に集まっている共同体のみならず、「普遍の教会」の全会衆と共に礼拝を行っているのである。キリスト教主義学校の学校礼拝にしても、そこに我々が「普遍の教会」とのコミュニオンを認めうるならば、それは教会全体の業として認めうるものなのである。この時、その礼拝が「純正」であるかどうかという議論は意味を持たない。教会の中で sacrament としての礼拝——例えば聖餐式——こそが真の意味での礼拝であるということを仮に認めたにしても、教会内に様々な諸式が行われており、それらが同じ教会によって行われることをもって sacrament 的な意味合いを持つと言う理解を我々が取りうるならば、キリスト教主義学校の礼拝も、それが「普遍の教会」とのコミュニオンのうちに行われるがゆえに、同じく sacrament 的な性格を持っていると理解しうるのである。

キリスト教主義学校は拡張された概念としての教会の一部ではあるが、しかしそれが「グレー」の領域に属していることもまた確かであり、その領域における働きこそがキリスト教主義学校の使命であることは前節でも述べた。この領域に属するキリスト教主義学校が、「普遍の教会」とのコミュニオンを認識する場合は、逆説的ではあるが礼拝の場である。つまり、キリスト教主義学校において行われる礼拝は、「普遍の教会」とのコミュニオンのうちに行われるその礼拝を通して、学校全体が「普遍の教会」とのコミュニオンにあることを指し示す場である。

また、学校全体に対して礼拝が持つ意味も重要である。一例を挙げれば、本学では保育者や介護福祉士の養成というプログラムに特化している性格上、学生たちが実習に出て行ってキャンパスに不在になることが少なくない。特に、秋の実習期には保育科1・2年と介護福祉専攻科——保育専攻科をのぞく全ての学科ということ——の学生が実習に入り、学内は閑散とする。しかし、この時にもなお、週1回の全学礼拝は在校中の学生たち

と教職員によって守られる。そしてその中で、実習中の学生たちを覚えて祈る。学校礼拝という場が、その学校という共同体のコミュニオンを可視的に示す場であればこそである。そしてこのコミュニオンは、単なる仲間内の居心地の良さということを超え、「普遍の教会」とのコミュニオンのうちにあるがゆえに、礼拝の場に不在ではあるが「普遍の教会」の交わりの中に受けとめられている、各地で実習中の学生たちの存在が貴重なものとなる。

加えて、「礼拝」という語が「奉献」、「真の価値」という意味をも含むものであることにも改めて着目したい。キリスト教主義学校において、学生たちの広い意味での奉仕や、礼拝での献金を含む募金活動などが行われ、それらの働きが礼拝の中で覚えられる時、それらは単なる善行を越えた意味を持つ。それは、それらの礼拝が聖餐式とのコミュニオンのうちにあるがゆえに、キリストの自己奉獻の業に参与する行為として自覚されるものとなる。また、高橋が指摘したように、真の価値、すなわち神に向けての導入教育としての礼拝の意味も重要である。礼拝は学科と同じ意味での教育行為ではないが、しかし全人的教育というキリスト教主義学校の大きな目的の上で、礼拝が持つこのような価値は軽視されてはならないものであろう。

キリスト教主義学校は、単にキリスト教的精神に則った教育を行うがゆえに教会なのではない。礼拝を通して、その学校全体がコミュニオンのうちにあることを覚え、そしてその礼拝を通して学校全体が「普遍の教会」とのコミュニオンのうちにあるがゆえに教会なのである。そこで学び・働く学生たちや教職員たちは、「クリスチャン」と呼ばれるカテゴリーに属していようがまいが、このコミュニオンのうちにあることによって、広い意味での教会のメンバーなのである。そして教会は、このメンバーたちとの交わりを常に喜びとしていなければならないと思う。

#### 【注】

1 船本弘毅「学校礼拝についての神学的考察」、『キリスト教主義教育：キリスト教主義教育研究室年報』（関西学院キリスト教主義教育

研究室）No. 7、1979年、pp. 66-68。

2 船本弘毅「学校礼拝についての一考察」、『キリスト教主義教育：キリスト教主義教育研究室年報』（関西学院キリスト教主義教育研究室）No. 11、1983年、pp. 53-62。

3 竹田伸一「キリスト教大学と礼拝」、『金城学院大学キリスト教文化研究所紀要』4、2000年、pp. 107, 110-111。

4 船本弘毅「キリスト教学校の礼拝」、『キリスト教主義教育：キリスト教主義教育研究室年報』（関西学院キリスト教主義教育研究室）No. 21、1992年、pp. 151-160。

5 倉松功「キリスト教学校礼拝論」、『教育の神学』（学校伝道研究会編）、ヨルダン社、1987年、pp. 116-125。

6 佐々木慶照「キリスト教主義学校における礼拝：カトリック学校のミサを中心に」、『礼拝と音楽』37、1983年、pp. 30-35。

7 O. クルマン（前田護郎訳）『キリストと時』、岩波書店、1954年、pp. 185-189。

8 コミュニオン教会論の概要については、例えば拙著「信徒が司式する主日礼拝の意義」、『神学の声』（聖公会神学院）Vol. 38、No. 69、2004年、pp. 74-79参照。

9 この考え方は、カール・ラーナーの「無名のキリスト者」という考え方に似通っており、ゆえに「無名のキリスト者」が他宗教の人々に対して持ちうる問題を同じように持つと考えられるかも知れない。しかしここでの大きな違いは、キリスト教主義学校に学び働くということは、それ自体その個人の自覚的な決断によるものであるということである。洗礼とは形式は異なるが、しかしなお個人の自由意志に基づく決断の結果として一人一人がそこにいるという事実は決して軽視されるべきではない。ゆえに筆者は、キリスト教主義学校への入学や雇用に際して、本人がキリスト教主義学校に学び働くことの意味を理解していることを確認する責任が学校側に必然的に生じると考える。

10 拙著「キリスト教 Q&A」、『ちゃべるにゅーす』（名古屋柳城短期大学）第 7 号、2003 年。

## The Meaning of School Services at Christian Schools — An Activity to Make "a Christian School" into the Church —

Ichihara, Shintaro David\*

One of the characteristics of Christian schools in Japan is that most members of these schools are categorized as non-Christians, and yet most of those schools have school worship services held by these same non-Christians. This means that "a Christian worship service of non-Christians, by non-Christians, and for non-Christians" is popular, and the service is recognized as an essential part of quality Christian education.

The traditional and still popular tone of discussions on the nature of worship services at Christian Schools is to distinguish these school services from those of churches; school services, which are not recognized as "genuine" services, are held primarily to draw students into Christian churches. This is one of the reasons why Christian schools in Japan are often called "mission schools", and this understanding of school services is still strongly rooted in this missionary perspective. On the other hand, there are some who claim that school worship services are indispensable to being a *Christian* school, because Christianity simply cannot be Christianity without worship.

Communion ecclesiology teaches us to recognize the Church as the communion, and in this communion, Christian schools can be embraced as part of the Church. The Church's mission is the actualization of communion, something that certainly appears at Christian schools. Christian schools are not merely equals of the church. More importantly, they are *in communion* with the Church, an essential part of the Body of Christ.

In this understanding of Christian schools, school worship services have a special meaning and a distinctive role in the life of the greater Church. That is, it is at the school service where the school recognizes and comes into communion with the Church through worship, which is in communion with the sacrament of the Church. While the school service does indeed express the communion in each school, it is also critical to recognize that the school service expresses communion with the greater Church. In this way, school worship services are no less an essential part of the life of the Church. Christian schools are also the Church.

キーワード：礼拝 (*service, worship, liturgy*), 教会論 (*ecclesiology*), コミュニオン (*communion*)